特集 超新星特集

藤原定家の客星

臼井 正（京都学園大学）

かに星雲（M1）のもととなった超新星が1054年に爆発してから、今年でちょうど950年になるが、その詳しい記録が藤原定家の日記『明月記』に残されている。オールトの雲で有名なオールト博士が1987年に来日したときに、冷泉家を訪れて『明月記』の原本を実見した[1]ことからも分かるように、日本が世界に誇る天文記録である。ただし、定家が生れたのは1162年で、超新星が出現してから100年以上も後のことだから、定家が実際に超新星を見たわけではない。

この超新星については、福江氏の『天文教育』の2002年7月号の記事があるので、ここでは定家が客星の記録をどうやって手に入れて、なぜわざわざ日記の中に残したのか、を中心に探ってみたい。

1.『明月記』の客星

定家は藤原俊成の子として応保二(1162)年に生まれ、19才の時から『明月記』の記述がはじまる。当時の日記は今と違って、儀式の詳細を書きとめて子孫に伝えるためのものだった。定家が生きたのは、源平の争いから鎌倉幕府の成立、承久の乱へと続く激動の時代に当たる。青年期までは裕福だったが、後鳥羽上皇の庇護のもとで歌人として活躍し『新古今和歌集』の撰者をしたころは、官位の昇進もなく経済的にも苦しかったようだ。

歌会に提出した定家の和歌が後鳥羽上皇の怒りに触れ、自宅謹慎を命じられたこともあった。しかし逆にそのため、直後に後鳥羽上皇が起こした承久の乱と無関係でいられたらしい。承久の乱後の京都では、九条家や西園寺家といった鎌倉寄りの勢力が実権を握ったが、九条家は定家の主家、西園寺家は妻の実家に当たることから、定家も官位が上がり、やっと余裕のある生活を送った。そして『小倉百人一首』を選んだり、『源氏物語』をはじめとする王朝文学を書き写したりしながら余生をすごし、80才でその生涯を閉じた。

かに星雲のもととなった超新星の記録は定家69才の時、寛喜二（1230）年に出現した客星の所に出てくる。客星とは、普段見慣れない星のことで、超新星、新星、それから彗星も含むが、この時の客星は彗星だった。以下、その時の経過を斉藤国治氏の『定家「明月記」の天文記録』[2]をもとに簡単にまとめる。

客星の記述が初めて出てくるのは十一月一日（ユリウス暦で1230年12月6日。以下の日付は旧暦）のことで、四日には定家自身この星を見て、「この星朧々として光薄し。その勢い小にあらず。」と記している。続いて「去る二日、泰俊朝臣示送す。」として彼からの報告が書かれているが、その中に「当時のごとくば、客星の条不審なし（今のような時世では客星が出現しでも不思議ではない）。」とあるのは、この年と次の年にかけて起きた記録的な飢饉のことを指すと思われる。

十一月五日には、「備州来たり、客星の事上下殊に驚き恐るる由、粗々これを語る。」の後に、客星の先例として5例挙げられているが、この中にはかに星雲のもととなった超新星は含まれていない。そして、これ

らの客星が出現した年の出来事を調べた結果、1例だけは何事もなかった（皇子誕生のみ)、つまり4例はやはり不吉なことが起こった、とある。

しかし、この日の話は曖昧だったらしく、十一月八日の条には、「客星の事、不審により泰俊朝臣に問う。返事かくのごとし。暁夕東西の条、驚きて余りあり。」として、この日の末尾に客星出現例として8例が挙げてある（図1)。これらの情報は安倍泰俊から得た報知だと考えられる。その中の6番目がかに星雲のもととなった超新星だが、他に1006年のおおかみ座の超新星(5番目)と1181年のカシオペア座の超新星(8番目)を合わせて、計3例の超新星の記録が含まれる。かに星雲以外の超新星の残骸も現在、電波源やエックス線源と同定されている。また、2番目の貞観十九（元慶元：877）年の客星は彗星だったが、これが2002年に発見された池谷・張彗星の3公転前の記録ではないか、という指摘がイギリスのJonathan Shanklin氏によってされている[4]。

2．1054年の超新星

1054年の超新星については「後冷泉院・天喜二（1054）年四月［五月］中旬以後の丑の時、客星觜（し)・参（しん）の度に出づ。東方に見（あら）わる。天関星に孛（はい）す。大きさ歳星の如し。」とあり、丑の時は午前2時ごろ、客星が觜・参と同じ赤経に出た（[付記］参照)、(明け方の）東方に見えて、天関星（おうし座のゼータ星；図2参照）のそばで、歳星（木星）のように輝いた、ということである。また、四月中旬には超新星は太陽に隠れて見えないはずなので五月と訂正する必要があるそうだ（天喜二年四月中旬はユリウス暦で1054年5月20日～29日、五月中旬に訂正すると同じく6月19日～28日に当たる)。『明月記』の文章とほとんど同文が13世紀の歴史書『一代要記』にもあるが、両者はともに同一の記録によっていると思われる[5]。一方、平安時代には多くの貴族が日記を書いていたが、なぜか1054年を含む11世紀中ごろの日記はほとんど残されていないので、同時代の記録は無い。

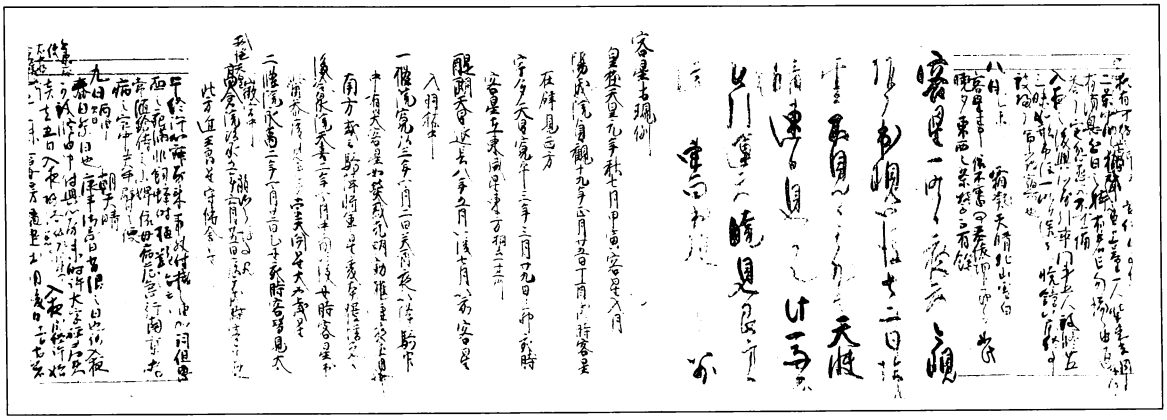

図1：『明月記』の客星の記録[3]

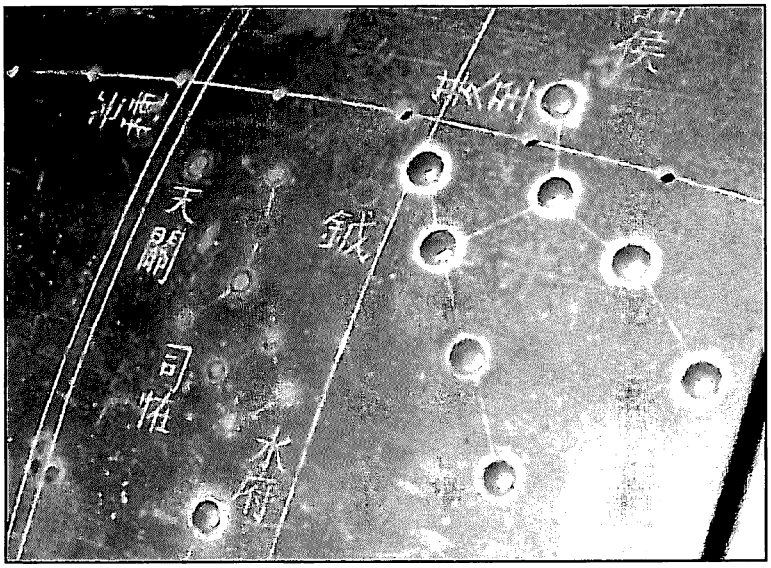

図2：大阪府枚方市の久修園院（くしゅうおんいん）所蔵の、江戸時代の銅製の天球儀。画像の左方に「天關」（「関」の旧字）の字が見える。その右はふたご座であり、左はヒアデス、下はオリオン座に当たる（天球儀なので、実際に見える星座の裏返しになっている）。

中国にも、この客星の記録が『宗史』や『宋会要』などの歴史書に残っている。『宋史』「天文志」の客星の項には、「至元元年五月己丑(ユリウス暦で1054年7月4日)、(客星) 天関の東南[西北]に出づ。数寸なるべし。歳余にして稍（やや）に（ようやく）滅す。」とある。「天関の東南」ではかに星雲との位置関係が合わないので、西北の誤りとされる。『宋会要』の嘉祐元年三月（1056年4月）には、「司天監言う。客星没す。これ客去るの兆しなり。はじめ至和元年五月の晨（あした：あけがた）に東方に出でて天関を守る。昼も現われて太白（金星）の如し。芒角四出し、色は赤白。凡(およ)そ現わるること二十三日。」とあり、見えなくなるまで合計22ヶ月間かかり、最盛期の23日間には昼間でも見えて、金星のように明るく輝いたことが分かる。

日本と中国の他には、アラビアに「われわれの時代の有名な疫病の一つは、あの素晴らしい星がヘジラ暦446年（西暦1054年）にふたご座に現われた時のものである。」という一文があるだけだ。ネイティブ・アメリカン（インディアン）がこの超新星爆発を見て描いたのではないかとされる壁画もあるが、確証は無い。ヨーロッパでは爆発の記録をいくら探しても今に至るまで発見されておらず、日本と中国の記録は爆発の年と位置が詳しく分かるという意味で、現代天文学にとっても非常に貴重なものと言える。

3．藤原定家と安倍泰俊

客星の情報は、『明月記』の中にも名前が出てきた安倍泰俊から手に入れたと考えられるが、定家とこの安倍泰俊とはどのような関係だったのだろう？『明月記人名辞典』[6]で調べると、安倍泰俊は陰陽寮に属する漏刻博士で、嘉禄元(1225)年（定家64才）から寛喜三(1231)年（定家70才）にかけて10回以上登場することが分かった。養父の安倍泰忠も、建仁三(1203)年（定家42才）から寛喜三(1231)年（定家70才）に亡くなるまで同じくらい出てきて、定家に何度か天変を知らせている。『訓読明月記』[7]によって泰俊が登場する所をまとめると次のようになる。

天変を知らせる：客星を含めて2回。

定家のために陰陽道の祭りをとりおこなう：「鬼気祭」2回、「泰山府君祭」「土公祭」各1回：次に引用する所には、泰忠と泰俊が共に出てくる。

十三日。天晴る。司天の説、伝え聞く。

今月十一日、歳星（木星）と 鎮星(土星）共に相犯す、両度あり。(中略）昨日の奏見泰忠朝臣なり。今晩、家中の 青女（あおおんな：召使い）夢想あり。よって十五日の晩、泰山府君の祭を修すべき由、泰俊朝臣に示し了んぬ。(嘉禄二年八月）
方違えのアドバイス。
定家の新築中の家（一条京極邸）の棟上げの日時を決める。
定家の家に来て、その頃頻発していた地震について話す。
定家の家の畳をねずみが食い破ったことについて占う。病気と火事に注意せよ、とのこと。
泰忠の病状について話す。泰忠の死去後、定家に遺言状を見せる。(計３回）

マンガや小説で活躍する陰陽師と違って、実際の陰陽師はこのような地味な活動をしていたようだ。貴族と陰陽師とのつながりは、定家に限らず当時はよくあったことで、たとえば藤原道長は、安倍晴明・賀茂光栄・安倍吉平（晴明の子）を個人的に用いていた。貴族は陰陽師から個人的にアドバイスを受け、陰陽師は経済的な援助（米などの現物支給や荘園の管理職など）を受ける、という関係にあった。定家が過去の超新星の出現例を入手したのも、陰陽師・安倍泰俊との日常的なやりとりの中だったのだ。

さて、『明月記』の客星記録の部分を見ると、字体が違っていることが分かる。「客星の事、不審により泰俊朝臣に問う。返事かくのごとし。暁夕東西の条、驚きて余りあり。」までの書体と、次の「客星、一昨日の夜前全く現じ候い了んぬ。」からの書体は異なり、更にかに星雲を含む「客星出現例」の部分は、また別の書体になっていて、この十一月八日の条は、合わせて３種類の書体が使われている。

筆者は 2002 年に京都文化博物館で開かれた「冷泉家展」で、『明月記』のこの部分を実見する機会に恵まれたが、その時に書体の違いに驚いた。同博物館に問い合わせた所、学芸員の土橋誠氏から回答を頂いたが、それによると、この部分は陰陽寮から届いた書状を日記の紙継ぎの部分で挟み込んでいる、つまり、ここは定家が書いたものではなく、陰陽寮の官人が書いたと見られる、とのことだった。これまでは専門家でも現物を見る機会がほとんどなかったらしく、今まで定家の超新星を紹介した文章では、定家が自分で調べて書き写したことになっていた。しかし、実は陰陽寮の役人の関与が大きかったことが、『明月記』の原本からも明らかになってきたのである。

４．客星と陰陽道

それにしても、なぜ定家は自分が生まれる前の客星に興味を持ったのだろうか？この時代には彗星や流星が出現すると、大赦が行われたり神社や寺でお祈りが捧げられたりしたように、天変は大変恐れられていた。『明月記』にも「客星の事、上下（の人々）殊に驚き恐るる」「甚だ不吉」「今日十三社奉幣（客星御祈り)」などとあり、貴族ばかりでなく広い層の人が天変に注目し、また恐れていたことが分かる。また、過去の客星出現の年を調べても、何事も無かったのは１例だけだった、つまりそれ以外はやはり悪いことが起こった、とも書いている（十一月五日条)。『太平記』巻第三十七[8]には、「犯星客星出現湖水旱(ひでり）の事」として、次のように書かれている。

「康安二(1362)年２月、都には彗星・客星同時に出でたりとて、天文博士・宿曜師が吉凶を勘じて密奏（密かに報告）す。『客星は用明天皇の御宇、(物部）守屋逆臣（もりやのぎゃくしん）仏法を亡（ほろ）ぼさんとせしかば、始めて見えけるより今に至るまで十四箇度の出現なり。その中二度は祥瑞にて、十二箇度は大凶なり。彗星は（中略）これまで八

十六箇度、一度も災難ならずと云ふ事なし。もつとも天下の重き慎みなり。』と、一同に勘進申しければ、(以下略)」

この時の客星は彗星だった。また、『日本天文史料』[9]によると、貴族の日記に過去の彗星出現のリストがある例として、藤原宗忠の『中右記』長承元(1132)年八月二十二日条と、藤原忠親『山槐記』治承二(1178)年正月七日条がある。後者には42個の彗星の記録のそれぞれに、その後に起きた事件や天皇・貴族の死亡例が記されている。当時は、天変が不吉な前ぶれとして怖れられ、これから何が起きそうかを予測しようとして、過去の出現例に興味が持たれたのだった。

『群書類従』[10]に収められた長治三(1106)年の天文勘文にも過去の彗星の出現例が記されている。陰陽寮では天変が起きると、朝廷に提出する報告書が書かれたが、これを天文勘文という。そこには、天変の観測記録と、それについての占いに加えて、過去の前例が記されることになっていたようだ。この天文勘文を書くために、陰陽寮では過去の出現例が調べられ、そのリストが陰陽師から貴族へ渡ったと考えられる。しかし、陰陽寮の天文記録そのものは、その後の度重なる戦乱で失われてしまったのだろう。

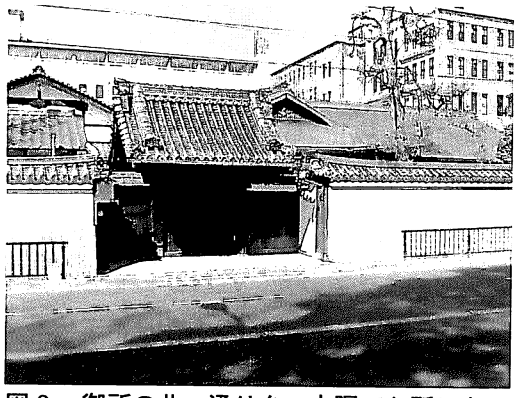

図3:御所の北、通りを一本隔てた所にある冷泉家。まわりを同志社大学に囲まれている

超新星の記録は、寛喜二(1230)年に現われた彗星がたまたま客星とされたために、陰陽寮で客星の過去の出現例が調べられ、それが安倍泰俊を通じて定家に伝えられたことになる。そして、『明月記』は定家の子孫である冷泉家(図3)によって現在まで大切に伝えられ、2000年には国宝に指定された。

定家は現代の天文学的な興味から超新星の記録を残したわけではないが、動機はともかく、日本が世界に誇る天文記録であることに変わりはないのだ。

[付記] 「觜・参の度」について

『明月記』の1054年の客星の記録にある「觜・参の度」のうち、觜(オリオンの頭)と参(三ツ星)は中国の二十八宿の星宿名である。月が全天を一周するのに約27.3日かかることから、天の黄道または赤道に沿った領域を28に分け、月がそれぞれの星座に宿ると考えて、二十八宿と名付けられた。「度」は、他の記録に「彗星、尾(び:さそり座のしっぽ。二十八宿の1つ)の度、貫索(かんさく:かんむり座)に近く見わる」とあるように、二十八宿の星座でおおよその赤経を表わすのに使われたようだ。中国では二十八宿のそれぞれから距星(基準となる星)を選び、そこから「昴宿の四度」というように赤経を表わしていた。ある星宿の距星から次の星宿の距星までが、その星宿の範囲だったが、西洋の12等分された黄道12星座とは異なり、間隔はまちまちだった。図2の天球儀の写真では、縦線が二十八宿のそれぞれの範囲を示しているが、觜宿の範囲が極端に狭くて、ほとんど二重線になっていることが分かる。1054年の超新星の場合、觜と参の境界付近に出現したので、この2つの星宿名を併記したのだろう。

二十八宿の星座を使って客星のおおよその赤経を記したのは、中国の分野説によると思われる。中国の占星術では天球を赤経ごとに

区切って、それぞれを中国国内の地域に割り当てていた。そして天変が起きると、それに対応する地上の地域で異変が起きると信じられたが、これを分野説という。

一例を挙げると、『晋書』「天文志」には232年のこととして次のような記事がある。

孛星（はいせい：尾の無い彗星）が翼宿（コップ座。二十八宿の1つ）に現われ、太微垣の上将星（しし座のシグマ星）に近づいた。占によれば、「軍隊が失われる」と。

甘氏（春秋時代の甘徳のこと。占星術の著作があった）の説では、「孛・彗の当たる国では、災害を受ける」と。翼宿はまた楚の分野で、孫権の領土である。翌年、権は遼東での戦いに敗れた。[11]

『晋書』「天文志」には「彗星が○○に現われ」という記述が多数見られるが、○○には二十八宿の星座名が入ることが多いので、これらは彗星が出現した星座ではなく、おおよその赤経を表わしていると考えられる（ただし、天の北極近くの彗星は出現した星座が書かれている場合が多い）。分野説はもともと二十八宿付近を巡る月や惑星（特に木星）の現象を占うために考えられ、それが彗星に適用されたときには赤緯が無視されたのだろう。

日本では江戸時代の天文学者・渋川春海が『天文分野之図』を著わして、京都から見た方位にもとづいて、日本国内の地域を分野に割り当てている。しかし、それ以前に日本独自の分野が作られたことは寡聞にして知らないので、客星の記録に「觜・参の度」とあるのは、分野説による占いのためというより単に中国のまねをした慣習に過ぎないと思われる。

参考文献

[1]閼伽出甕論考集「『明月記』の客星記録」(4)
http://members.at.infoseek.co.jp/Accord/BIGLOBE/kyakusei/nip19201.htm
[2]齋藤国治，1999，『定家「明月記」の天文記録』，慶友社
[3]冷泉家時雨亭文庫編，2003，『明月記 五』，朝日新聞社
[4]アストロアーツ・天文ニュース（2002年3月4日）
http://www.astroarts.co.jp/news/2002/03/04ikeya-zhang/index-j.shtml
[5]臼井正
http://homepage3.nifty.com/silver-moon/teika/ichidai.htm
[6]今川文雄，1985，『明月記人名索引』，河出書房新社
[7]今川文雄，1977-1979，『訓読明月記』，河出書房新社
[8]長谷川端校注・訳，1994-1998，『太平記』，小学館
[9]神田茂編，1978，『日本天文史料』，原書房
[10] 塙保己一編，1980，『群書類従 第27輯』，続群書類従完成会
[11]藪内清編，1975，『中国の科学』，中央公論社

[付記：編集委員長より]

2004年9月、藤原定家にちなんで小惑星(8305)にTeikaと命名された。1995年2月の群馬県大泉の小林氏によって発見されたもので、火星・木星間を周期3.7年で公転している。今はみずがめ座にいるが、2005年7月初にはちょうどかに星雲のあたりに来る。